

[12] キーロフ劇場バレエ ～首筋の美～

(マリインヌキー劇場・バレエ)

1991年6月14日 東京新聞 夕刊

このところソ連の舞台芸術の来日公演が相次いでいるが、そのなかにはレニングラードとか、ポリシヨイとか銘うっているものが多く、なんともまぎらわしい。しかし、ことバレエに関するかきり、いま来日中のキーロフ劇場こそは真正銘のレニングラードだ。世界に冠たるロシア・バレエのなかでも、ほとんど別格の本物である。その技術水準の高さにおいて、これまでキーロフ劇場を上回るバレエ団が存在したためではない。

バレエはいわゆる「基本」が論理的かつ精緻なものとして確立しているために、全世界に共通する普遍的な性格をもつ舞台芸術として、人材や技術の交流が可能だと、ふつう考えられている。それは確かにそのとおりではあるのだが、しかしバレエが本当におもしろくなるのは、そうした共通の規範をこえたところにある個性なのである。それも踊り手各人の個性ではなく、バレエ団の個性なのだ。どのバレエ団を見ても、まさにそのバレエ団以外ではありえない個別の性格を持っていて、たとえ同じ作品を演じたにしても、その表現するものが、実にさまざまに異なる趣を持つのである。

日本での外来公演と言うと、とかく花形のソリストばかりが話題になって、それぞれのバレエ団の、多人数のチーム・プレーによる総合芸術としての特質が問題になることが少ないのは、残念なことだと私は思っている。花形ソリストは文字通り花のようなもので、つぎつぎ咲いて

〔12〕 キーロフ劇場バレエ ～首筋の美～

(マリインヌ及キー劇場・バレエ)

1991年6月14日 東京新聞 夕刊

は枯れていく。しかしバレエ団の特質、あるいは神髄はしっかり受け継がれて残る。だからこそ芸術なのだ。

キーロフ・バレエは基本の正確さと深い精神性で他の追随を許さない。このメソードの特徴は体の中心軸が真っ直ぐなことで、いかなる瞬間にもバランスを崩さず、そのために動きに非常な安定感がある。ひとつのポーズから次のポーズへ、勢いにまかせて適当にずれこむ、などということとは決してない。また肩をしっかりと下ろして、首筋をのばし、首から指先までを一筋の柔らかい曲線にする。そうすると、胸に何とも人間的な深みのある表情が描きだされるのである。本当に、首筋をこれほど美しく見せるバレエ団は他にはない。ときには幽玄とも形容したくなるようなキーロフの精神性は、そういうわけで身体的な技法と表裏一体をなしているのだが、感動的なのは、コール・ド・バレエの末端にいたるまで全員がそれを体現しているということだ。

今回の来日メンバーのなかにも、アスイルムラートワ、レジュニナ、リエパ、ルジマートフと、話題性にとんだソリストが多数いるが、それよりは過去をふりかえって、あのブランシンのや、ヌレエフ、バリシニコフなどが、いずれもキーロフ劇場出身であることを思いかえし、キーロフ・バレエの何が彼らを育てたか、何が彼らを世界へ飛び出させたか、それを考えてみるのも一興かもしれない。